外国人として生きる

僕たちの人権運動
―日本の若いマイノリティたち

吉富 志津代（よしとみ しづよ）
NPO法人　多言語センターFACIL

NPO法人 多言語センターFACIL（神戸を中心に外国人コミュニティ支援のため多言語サービス事業を展開している）

ヒップホップにメッセージをのせて

二〇〇八年春のある夕べ、大阪ミナミのアメリカ村にあるライブハウスでは、いつものように若者たちがヒップホップの曲にあわせて踊り、舞台からミュージシャンたちが熱いメッセージを送る。

「俺たちはスペイン語？　日本語？　ことばなんて関係ナ～イ」

「アイヌはもういない？　われここにあり！　アイヌはここに！」

「ハルモニたちの思いは、燃えてリンになってからやっとわかった」

そう、彼らのほとんどが、ブラジルやペルーの日系人、米軍基地で育ったアメリカ人、在日韓国人三世、アイヌなどの多様なルーツをもつ若者たちなのだ。

文字にすれば深刻なメッセージが、湿っぽくなく、軽快に、カッコよく口からほとばしる。そして彼らの合いことばは「あくまでポジティブ！」と叫ぶ。在日ベトナム人二世のナムも、「オレは神戸出身のベトナム人ラッパー！」と飛び入りでアピールする。ヒップホップの大好きな関西の若者たちが、かけ声とともに満員のホールでマイノリティの若者たちと一体化する雰囲気にのみこまれてしまった。このコンサートの収益金はアメリカのハーレムの子どもたちのために活用されるという。

そういえば、以前からヒップホップは、移民の多いドイツやフランスなどでも、若い世代の移民が自分たちのメッセージの発信の手段としてきた。これだけ多くの移民がヒップホップやラップの世界で活躍していることは偶然ではなく、移民やその子どもたちが互いを認め合い、協力しやすいのは、このジャンルのもつ独特の開放性にあると見る研究者も少なくない。

今回のこのチャリティコンサートを主催した「ミックスルーツ関西」の代表が、須本エドワード豊だ（以下、エド）。彼は、一九八一年ベネズエラで、ベネズエラ人の父親と日本人の母親のあいだに生まれた。彼が二歳のときに父親が他界し、母親は彼とともに日本に戻った。母親は、彼がベネズエラにルーツをもつことを大切に思って育て、やがてエドは神戸のインターナショナルスクールに進学する。活発な性格のエドは高校に入ると、四歳のときから好きだったピアノでジャズバンドに参加し、高校三年でチャリティジャズフェスティバルを開催する。また「バイリンガルスピーチコンテスト神戸市長杯」に、アメリカにおけるメルティングポットとサラダボウルに関するテーマで参加し、金賞を受賞している。

「ミックスルーツ関西」立ち上げ

そのエドがあらためて自分の「アイデンティティ」と向き合う経験をしたのは、ワシントンの大学に進学したときだった。アメリカという移民国家で、ベネズエラ国籍でありながらスペイン語を流暢（りゅうちょう）には話せない日本出身の彼は、周囲の人びとには不思議な存在として受け止められたのである。それをきっかけにエドは本気でスペイン語を勉強しはじめた。そして卒業後はニュージーランド、フランス、中国など、国連関係の仕事を転々とした。アメリカや中国などで環境に関するシンポジウムなどの企画、開催をするという経験の積み重ねにより、何かふっきれ、自信を取り戻していったという。二〇〇五年、エドは日本に戻り、神戸で国連関係の職につき途上国の開発援助に携わっている。

帰国と同時に彼は、ミクシィ（ネット上のコミュニティ）を活用して、「ミックスルーツ関西」という団体を立ち上げた。多ルーツの子どもとその親たちのネットワークを広げることを目的とするものであった。その活動は、多文化な背景をもつアーティストたちの作品展やコンサートからドキュメンタリー映像上映、花見やクリスマス会まで多岐に渡っている。今回のヒップホップのライブもその活動のひとつである。

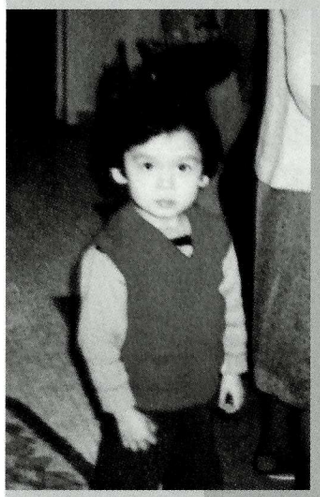
わかりやすくカッコよく

エドは言う。「むかし、ホームレスの人に道でクリスマスプレゼントを配るボランティアをしたことがあるんだ。でもそれは、何の解決にもならないって思った。その人は、たまたまプレゼントをもらえてとても嬉しそうな顔をしてくれたけど、もし僕に会わなかったらもらえなかったわけでしょ？もっと社会のしくみを変えなきゃ意味がない」。できれば、あくまでカッコよく、わかりやすく、おもしろく。「偉い学者や政治家が難しいことをいくら言ってもおもしろくないし、若者は関心を示さない。でもマイノリティ問題なら、たとえば自分たちのような当事者が積極的に、わかりやすいアートで発信することで社会は変わるかもしれない」。

エドの夢は果てしない。今後は二ヵ月に一度ほど東京と神戸で、多文化共生と教育について身近なテーマでシンポジウムなどを開催したいと思っている。たとえば、外国人の子どもの高校進学率の低さを考えるために。それも「難しい話じゃなくて、僕たちのやり方」で。

時代を経て、かたちを変えてようやく日本でも展開され始めた若いマイノリティたちの新しい「人権運動」に大いに期待したい。生まれや国籍を超えて「地球人」をめざすかのような彼の生き方に出会い、その思いはさらに強くなった。

万博公園での花見にて
「ミックスルーツ関西」に参加している子どもたちと
（2007年）



4歳の頃のエド（1985年）

デヒワラ、スリランカのスラムにて
防災と持続的開発ワークショップに
参加したコミュニティの代表の女性に
活動報告するエド（2006年）

エドが始めた活動を引き継いだ地域の高校生が
テレビの募金番組に参加する様子

チャリティイベントにて
ピアノの即興演奏をするエド

ミックスルーツのサイト　http://www.mischlingroove.org/